

日刊 THE NIKKAN 工業 KOGYO SHIMBUN 新聞

8月23日 火曜日

2016年(平成28年)

不撓不屈

ふとうふくつ

①

「龍野コルク工業」という社名からコルクが頭に浮かぶが、会社の歴史の中では発泡スチロールが社業を支えてきた。社長の片岡孝次は「福島県の会社がうちとほぼ同時に期だったが、日本で初めて発泡スチロールを製造した」と胸を張る。

サンダル底生産

龍野コルク工業

発泡スチロール主力に

底にしたサンダルを作った。サンダルはよく売れたものの、炭化コルクボイドの価格が安定しない。そこで炭化コルクを作ろうと大阪の加島(大阪市淀川区)に工場を建てた。福井に「ドット」で発泡スチロールがコマーシャルレースに乗った」と助言をもらった克己は、早速材料を輸入して製造。1980年代初期には、自社で発泡スチロール製のボードに成形して、サンダルのソール(底)を作り始めた。

自社で成形

当時、孝次の父・克己は大学を卒業して家業を手伝っていた。隆次は克己に「そろそろコルクの代わりになる素材を見つけて、テストをしてみる」と注文を出した。克己は、旧制高校と京都帝大の先輩で後にノー

品質・自動化課題持ち越し

ベル化学賞を受賞した福井謙一を頼って、相談し

採用された。少年だった孝次は発泡スチロールの普及を目の当たりにし、90年代まで右肩上がりで業績が伸びた。

好業績の裏で

好業績にもかかわらず、隆次は克己に龍野コルクの社長を継がせな

「学者肌の克己は社長向きのではない」と、販売会いたが、輸入プロックの農産箱と土木用プロックの引き合いが増え売り上げは増加。4億円を投じて、本社内に第5工場を建設した。だが技術的に未確立の自動梱包ラインを導入した結果、2年を経ても自動化できていない。さらには、父・克己に半ば、だまされて入社していた孝次は頭を抱えた。(敬称略)



つた。86年長を招聘。2代にわたって隆次が死つてそれが続いた。去した際に、1人目の社長の時は、父・克己はまだ発泡スチロールが売には本体れていた。売っていたか(メーカー)ら品質が悪いことも悩む。社長の格設定がおかしいことも、社内では問題視されなかつた。2人目の社長が就任した頃から発泡スチロールの需要が落ち始めてきた。父・克己(同2人目)に発泡スチロールを見つけた。写真は69年の設立10周年記念式典

tk.co.jp